

夢サラダ Vol.51

2012.4.1 発行

市民活動の拠点を目指しています。

「今治市民活動センター」

指定管理者: (特非) 今治NPOサポートセンター

【お問合せ】TEL/FAX 0898-25-8234

E-mail imanpo@nifty.com

NPOが変わる! 社会が変わる!

「公(おおやけ)」のことを、行政・市民・企業が皆で支え合う仕組み「新しい公共」。昔は地域の中に確かにあった、人々の支え合い、地域を運営する仕組みを今風に作り直すことだと感じています。「新しい公共」の担い手として期待されるNPO。その活動を応援する制度と言える「改正NPO法および新寄付税制」が施行されます。その活用はいかに・・・。



NPO法人にとって

認定NPO法人(税制上の優遇措置を受けられるNPO法人)の認定要件が緩和!

従来: 寄付額が経常収入の20%を超えること
* 全国4万4千を超えるNPO法人の中で
わずか238・県内では1法人(2011年11月現在)

改正: 寄付者「3,000円×100人」を集めること
* 仮認定制度も導入! 是非、チャレンジを!



寄付者にとって

所得税に税額控除方式の導入。認定NPO法人への寄付金の減税額が拡大!

従来: 所得控除方式。所得が低いと効果が薄い。

改正: (寄付額-2,000円)×40%相当の減税
従来型(所得控除)との選択も可能
寄付金の実質的な負担額が約6割!
税金の使途を一部、自分で選べる!

今回の改正の狙いは、寄付者のメリットを高めることで、経済基盤が弱いNPO法人への寄付を促すこと。行政に代わる公共サービスの担い手として、NPOが期待されていることがうかがえます。寄付者に選ばれるNPOになるために! 個々のNPOの情報発信、寄付したい人と信頼できるNPOをつなぐしくみが求められています。



市民活動リポーター 第2弾!

リポーターの学生 集まれ!



市民活動取材したり、実際に体験したりしてまちが抱える課題や活動者の思いを発信する活動です。

募集締切: 2012年5月上旬

対象 今治市内の学校に通う高校生・大学生

期間 5月から10月頃まで

内容

①「市民活動リポーター」とは(セミナー)

市民活動の意義は? リポーターの役割は?
活動に必要な知識や技術をお伝えします。

②現場取材・活動体験

いくつかのNPOの現場に出向き、インタビューや活動のプチ体験をします。

③プレゼンテーション

インタビューやプチ体験で得た気づきを、自分なりの方法で発信します。



▲新聞記者の方に取材ノウハウを学ぶ様子。



▲発信方法は色々。
去年はラジオ出演も!

取材先のNPO 大募集!!

日頃の活動をアピールするチャンスとして役立ててみませんか。

対象 今治市で活動する

ボランティア・市民活動団体

内容 学生がリポーターになって、活動の現場を訪れます。

活動の様子や思いをお話してください。
体験できる機会をつくってください。

★学生目線でああなたの活動を発信します。

活動周知の幅が広がるかも!

★学生の視点やスキルを発揮します。

若いパワーを活動に取入れられるかも!



地域応援セミナーとうよ

若人発！集おう 語ろう 創ろう 未来の郷土

ふるさと

去る1月14日(土)、私たちの郷土を私たちの手で元気にしていこうと、愛媛県東予の5市町の有志による実行委員会が「地域応援セミナーとうよ」を開催しました。会場の新居浜市市民文化センターには愛媛県内を中心にボランティア・市民活動の実践者を中心に約400名が集結。



地域づくりの担い手である“若者”に焦点をあて、若者参画のしくみづくりについて議論しました。

「こんなまちにしたい！」東予の若者からのメッセージタイム

東予5市町の若者主体の活動報告からスタート。西条市・上島町・今治市・四国中央市・新居浜市の順にプレゼンテーションしました。高校生の手で作ったバリアフリーマップの紹介(四国中央市)、離島振興に取り組む島の“若い衆”のつながり(上島町)など、発表は多彩で、それぞれに故郷への熱い想いが語られました。



今治市の発表は今治精華高等学校の越智祐吾くん、高橋裕美さん、西岡舞さんが担当。今治市民活動センターで取り組んだ「市民活動リポーター」の活動を紹介。地域づくりの現場で出会った人の魅力、そしてその魅力を多くの人に伝えようとチャレンジした広報活動について発表しました。



「学校を超えた仲間、日常生活から一步踏み出した新しい世界との出会いが魅力」との感想を述べた3人。「自発的なボランティア活動の精神を周りの大人には理解して欲しい」、そんな社会へのダイレクトな声も飛び出し、会場には温かい笑いと共に拍手が起こる場面も。地域の大人に学ぶべきメッセージが、そこにはありました。



この催しの企画にあたって、今治の高校生が取り組む地域活動について事前リサーチ。



当日を迎えるまでに…

誘われて、踏み出した一步。そこで見えてきた地域に流れる時間…。今治の発表のテーマは「ボクらは、まちへ出てみた。～絆は動いてつむぐもの～」としました。



●市民活動リポーターとは

ボランティア・市民活動取材したり、実際に体験したりしてまちが抱える課題や活動者の思いを発信する活動です。

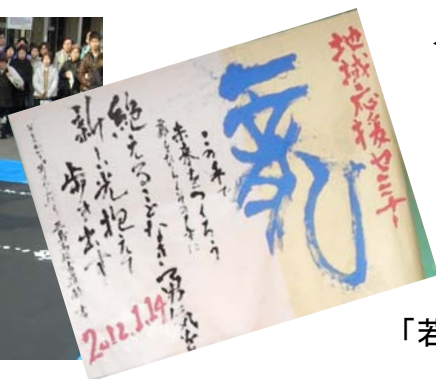
現在、リポーター募集中！(詳しくは1面へ)

★同時募集★

学生リポーターに現場取材に来て欲しいNPOを大募集！！

今年も募集中！





◀ 会場に花を添えたのは、書道
ガールズのパフォーマンス。
これぞ、若者のエネルギー！！



「若者の動きを地域の動きに！」講演



学生ボランティアセンターの設立、大学生の社会貢献活動支援等に取り組む石原達也氏（NPO法人岡山NPOセンター理事）が講演。若者を地域づくりの担い手として育てていく必要性と視点について助言がありました。「東日本大震災被災地を支援する取り組み、農山漁村の地域おこしに長期で参画する活動等、大学生を中心とする若者は熱心に活動しています」と、近年の若者の社会貢献への関心の高さを報告。若者の強みを捉え、当事者意識の芽生えを支援、地域づくりの担い手として、社会に関わる機会を創出していく大切さについて、事例を交えて紹介しました。

若者の強みと弱みは？

■瞬発力はある！

ゴールがはっきりしている「プロジェクト方式」がお勧め。

■自由な時間がある！

一方、本分もあり制限も。集中的・短期的に取り組むべし。

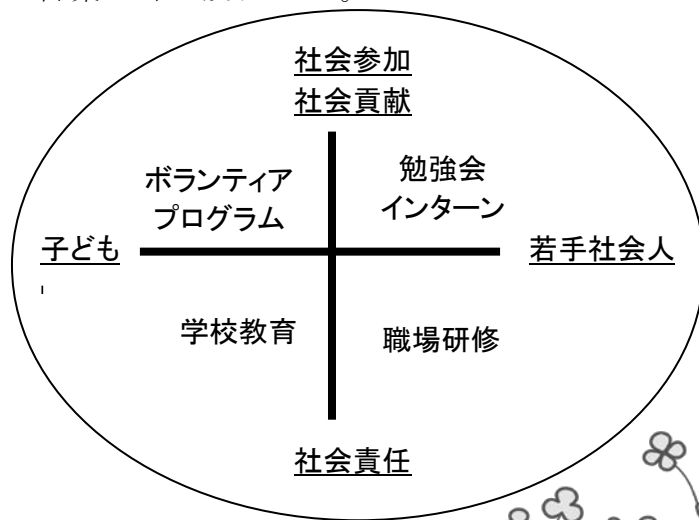
■立ち位置を支援して！

立場や所属を超えてニュートラルに学べる。経験は少ないが、“無知も良”。

“若者が地域に関わることは応援を得やすい”という言葉に皆、納得。適切な役割をつくることできれば、経験以上のチカラを地域に注いでくれることは間違いない！

求められる考え方は？

「ゴミが落ちていたら拾う」これって、ボランティアですか？社会人として、当たり前のことかもしれません。社会人として当たり前のこと、つまり、暮らしていく上で果たすべき責任と、社会貢献活動は違うのでは・・・、そんな言葉が耳に残りました。



参加者の声...



東予の美味しいもんが
並んだ「特産品販売」。
5市町の交流を促す
きっかけになりました。

- 今治の高校生が他校とつながりを持って活動をしていることに興味を持った。
- 高校生の本音に近い発言が印象的だった。
- 若い人達が自分の町を本当に愛していることが素晴らしいと思った。
- 学生のやることと線引きしない、本気で・・・大切だと感じた。
- きっかけづくりは大人の役割だと思った。

事例から学ぶ NPOと企業のパートナーシップ 「呼応しあう関係へ。」



●NPO法人ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン●

静かに、社会を変えていくプラットフォーム
どこまでも続く真っ暗闇をチームで進む。
寄り添ってくれるのは視覚に障がいを持つ人。
世界で17のエキシビジョンがあり、
54万人が体験する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」。



「目が見えない。それは何かが劣っているのではなく、違う関係性・豊かな文化があるのではないか」

そんな気づきから開発された「真っ暗闇のエンターテインメント」。自身が感銘を受け、日本で開催したいと取り組んだのが、NPO法人ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表の金井真介さん。挑戦し続けているのは、多様な異なる文化を、暗闇を使いながら、融合していくこと。多くのスタッフは、目が見えない人。目を使わず“対話”を導くプロフェッショナルです。



▲NPO・企業の両者から、協働のプロセスでの本音が聞ける有意義な会となった。



▲NPO・企業・行政と様々な立場から約 50 名が参加。ミニ DID もあり、盛況。

協働 それは異文化の融合

異なる文化を持つNPOと企業の協働。金井代表は二者を歯車に例えて説明しました。同じ地域社会の中で、同じ方向に回る歯車。近づいてもかみ合わない。一方が回転の方向を変えて、相手に合わせる。一見うまくいきそうだが、継続に無理が。どちらかが、どちらかに合わせる必要はない。もう一つの歯車を入れることが成功の秘訣だ！

「互いにとって、真ん中に入り、文化を融合させてくれる“歯車”が何なのか」皆が考えた大切なキーワード。田中社長曰く、“歯車”とは、通訳をしてくれる人のこと。タオル開発の現場では視覚障がい者の感性を、分かりやすい言葉に置き換えてくれるセラピストやディレクターの存在だったとか。

参加者の声

- 「いいものをつくっただけでは、売れない。評価してくれる人が必要」という言葉が印象的だった。
- 対等性も直感も歯車も深い話だと思った。
- 障がい者ならではの研ぎ澄まされた感性。今後様々な分野に活かしていく必要があることを感じさせられた。

先般、今治市民会館において、NPOと企業との協働の成功事例の一つとして注目される「ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン(NPO)」と「田中産業株式会社(今治市のタオルメーカー)」のお話を伺いました。そこで語られた成功のテクノロジーとは…。ご報告します。



DIALOG IN THE DARK JAPAN

1989年ドイツで誕生。
1999年以降、
DID ジャパンにより日本でも開催。

日常生活のさまざまな環境を織り込んだ真っ暗な空間の中へ、何人かとグループを組んで入り、暗闇のエキスパートであるアテンド(視覚障がい者)のサポートのもと、視覚以外の感覚を使い探検するイベント。企業の研修に活用されるなど、これまでに3万人以上が体験している。

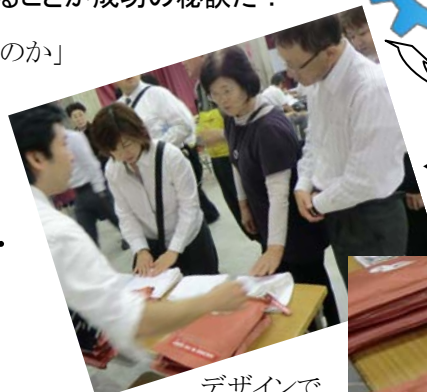
●田中産業株式会社●

究極のタオルをつくりたい

質の向上を進める“今治タオル”

使って心地よい肌触り。これを数値化できないか。
そんな思いを抱いていた時に出会い、実現したのが
「ダイアログ・イン・ザ・ダーク・タオル」。

真っ暗闇で感じたドキドキ・ワクワク。そこで得た感動。田中良史社長を共同タオルの開発に突き動かしたエネルギーは、誘われて参加した「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の体験でした。目が見えないアテンドと結ばれる対等な信頼関係、チームになった参加者との深いコミュニケーション。違いを認め、理解し合う、まさに“対話”するプロセス。「この体験が好きなんです。できれば1年に1回は体験したい。」、紆余曲折あった共同開発を支えた信念はこの一言に集約されています。



デザインで選ぶ人も多い中、真っ白で勝負。

◀パッケージにもこだわったDID・タオル。

